

各地で話題の病害虫

リンゴ葉腐病 (仮称)

学名: *Rhizoctonia solani* KÜHN

平成7年6月、東京都南多摩の一部のリンゴ園で、原因不明の葉腐症状が発生し、6～7月の長雨により激しい被害となった。東京都病害虫防除所において、罹病部から菌の分離・同定を試みた結果、*Rhizoctonia solani*によるものであることが判明した。

病徴ははじめ葉に暗緑色、水浸状の不整形病斑を形成し、多湿時には急速に拡大して葉腐れとな



東京都病害虫防疫所 竹内 純氏提供

る。罹病部には白色～褐色の菌糸が豊富に生じ、隣接葉や枝上を速やかに伸長し蔓延する。このため、罹病葉は菌糸により綴合わされ、あるいは枝に巻き付き、脱落せずに枝に張り付いていることが多い。罹病部には菌糸のほか淡褐色～褐色の菌糸塊及び菌核が形成される。発生は樹全体に認められるが、主に下部や中間部の枝葉に多い。

防除対策については、罹病樹葉を除去することが大切である。また、発生生態など詳細はまだわかっていないことから、薬剤防除も含め今後の調査が待たれる。

オクラ黒根病

学名: *Thielaviopsis* sp.

平成7年3月鹿児島県の半促成栽培のオクラで、生育が劣り主根の地際部が黒変する病害が発生した。鹿児島県農業試験場の診断の結果、罹病部から *Thielaviopsis* 属菌が分離された。本病は昭和62年高知県において報告されているが、鹿児島県で発生が確認されたのは初めてである。

本病は発芽直後から本葉3枚展開期までに発生がみられる。病徴は発芽後の生育が劣り、症状が



鹿児島県病害虫防疫所 徳永太蔵氏提供

激しくなると苗立枯症状を示す。これらの罹病株を掘り取ると主根の地際部が黒変し、側根、細根の一部も黒変している。症状がさらに進行すると細根が脱落し、黒変した主根及び側根のみになる。本病は低温期に発生しやすく、高温期には発生は少ないと考えられる。

本病原菌は菌糸が罹病植物に付着して土壤中で越冬し伝染源となる。また、厚膜胞子の状態でも土壤中に生存する。

防除対策としては連作をさけること、土壤消毒が有効である。

ミツモンキンウワバ

学名: *Acanthophasia agnata* Staudinger

英名: Three-spotted plusia

平成6年11月神奈川県茅ヶ崎市において抑制栽培のミニトマトを食害する鱗翅目幼虫が多発し大きな被害をもたらした。神奈川県病害虫防除所はこの幼虫をミツモンキンウワバであると確認した。本種はニンジンなどの害虫として知られているが、トマトへの加害が確認されたのは初めてである。



神奈川県病害虫防疫所 深山陽子氏提供

さらにイチゴでも小田原市で本種の加害が認められている。

トマトの被害は主として葉でみられるが、へたや果実でも認められた。葉の被害はヨトウムシ類の被害に似ており、葉柄のみ残して食べ尽くされる。果実では着色前の幼果を好み、果実に穴をあけて食害するためトマトの被害は大きくなる。本種が発生した場合は天敵利用による防除を試行しており、8月以降殺虫剤を使用しない方法で栽培を行っていた。

生物農薬は、化学農薬に比べ一般に対象病害虫の範囲が狭いため、その導入にあたっては他の病害虫の発生動向に留意し、生物農薬に影響の少ない薬剤との組み合わせ等による総合的な防除体系を検討することが必要である。

コアオメクラガメ

学名: *Lygocoris (Apolygus) lucorum*

(Meyer-Dur)

平成6年5月山形県内のオウトウ新葉に、小さな多数の穴があく被害が見られ、近くの幼果にも小さな吸汁痕が認められた。加害された新葉からはミドリメクラガメ類の若齢幼虫が発見され、また周辺のヨモギにも多数寄生していた。これを採集し、羽化した成虫を北海道教育大学で同定した。



山形県園芸試験場 渡辺和弘氏提供

結果、これらはコアオメクラガメであることが確認された。本種はヨモギなどのキク科雑草、ウリ科作物などに加害することが知られていたが、オウトウへの被害が報告されたのは初めてである。

山形県果樹試験場の調査によるとオウトウへの加害時期は5月上旬～下旬で、幼虫が展開しつつある葉や幼果を吸汁加害する。葉の吸汁痕は最初淡褐色小斑点であるが、展開するにつれ破れたような不整形の穴になる。また、幼果の吸汁痕は断面に深さ1mm程度の跡が残る。本種の幼虫は一見アブラムシに似るが、すばやく行動するため区別が可能である。幼虫の加害能力は高く、1日1頭当たり100個程度の吸汁痕を形成する。

今後は飛来源、飛来時期の特定などの発生生態の解明が待たれる。